

片側の未来

目次

歩き出す未来	255
手探りの未来	227
約束の未来	209
空白の未来	161
片側の未来	5

片側の未来

報われない恋、というものがある。

次第にかすんでいく風景の中、ただぼんやりとそんなことを考えていた。

「君の気持ちには、応えられないから。——ごめん」

大好きな人の唇から、不思議な言葉がこぼれてくる。自分に向けられているということははっきりとわかっているのに、まるで他人事みたいだ。黒のアタッシューケースを抱え直す長い指。その先に縦長の爪が綺麗に並んでいる。

「……永峰さん」

かすれる声をどうにか吐き出すと、そのまま視線を足下に落としていた。音もなくきびすを返して立ち去っていくブラウンのシューズ。それを見るのが辛くて目を閉じたのに、今度はだんだん遠ざかっていく靴音が耳元に大きく響いてくる。諦められない想いが何かに思いきり引っ張られた気がした。それが一瞬、ピンと痛いくらい張りつめてから、ぱちんと音を立てて弾ける。

——もう、泣いてもいいだろう。

私の合図を待っていたかのように、両目からどつと涙が溢れてきた。それは「やっぱり」という気持ちと、「どうして」という気持ちのせめぎ合い。同じような経験を懲りることなく何度も繰り返

返してる。もういい加減慣れるよって感じだけど。駄目だな、私。

かろうじて両手で数えきれる回数の玉砕の現場に、今日再び立ち尽くす。二十一歳、冬のはじめ。やけに冷たい涙が頬を伝っていくなど思ったら、いつの間にか雨が降り出していた。ここでロマンチックに雪が舞い降りてこないところが私らしい。このまま、風邪を引いて肺炎でもこじらせてしまえばいいな。そうしたら、あの人も少しは責任を感じてくれるだろうか。

頭に肩に次々と雨粒が打ち込んでくる。せつかく新調したニットスーツが濡れちゃうな。今日のためにと、ポーナス一括払いでわざわざ購入したんだっけ。そう思いつつ、歩き出した。さざめく雑踏の中、どうやってアパートまで戻ったのかも覚えていない。

目覚まし時計が鳴っている。布団から腕だけ出して、手探りで止めた。嫌だなあ、もう朝？ やっぱりって感じで、熱もなければ悪寒もしない。どうして私、こんなに頑丈にできてるの。もうちょっととしおらしくできればいいのに。

なかなか瞼を開けないまま、心の中で舌打ちする。こんな日は思いきって年休を使っちゃってもいいのかな。だけど、どこも具合が悪くないのに休むのはやっぱり気が引ける。それに今日から先輩がひとり休みを取っているんだっけ。そうなるって頭数もギリギリ。

難航する就職活動をぐぐり抜け、縁あって採用された会社。配属されたのは本社ビルに入つてすぐの案内カウンター、いわゆる「受付嬢」ってことね。

華やかな職場だと思われがちだけど、実はそうでもないの。真夏は自動ドアが開くたびに熱風が

真正面から吹き込んでくるし、これからの季節は最新冷蔵庫も顔負けの「瞬間冷凍」状態よ。どちらにせよ、過酷な状況でお肌に悪いことこの上ない。

大体、昨日はどうしたんだっけな。よく覚えてないけれど、クレンジングでメイクを落としたりくらいでそのままベッドに潜ってしまったに違いない。あんな状態では何にもしたくなかったし、食欲もなかった。大丈夫かなあ、ファンデーションが浮いちゃったら悲惨だわ。そんなことをうただ考えつつ、ぐるんと寝返りを打つ。

——がん！

「……え？」

何だか変だなと気づいて、慌てて瞼を開いた。目の前に見慣れない花柄の壁紙。そこに思いきり鼻のてっぺんをぶつけてしまった。良かった、鼻血は出ていないみたい。でも場所が場所だけに、あとから赤く腫れ上がったりしたら嫌だな。

——むにゅっ！

「えええっ？」

今度の今度はさすがに飛び起きていた。だって、投げ出した左腕が何かに当たったのよ。それも、すごく柔らかいものに……

ちゅんちゅん。晴れ渡った窓の外、さえずる雀の声。マンガやドラマでお決まりの朝の風景だ。でも、そんなことはこの際関係ない。

まず、気づいたこと。布団のカバーが昨日までと違う。ううん、それだけじゃない。部屋の配置

が、というか、部屋そのものが違っていた。昨夜まではベッドの右側に下りるように、左側を壁に寄せていたはずなのに、それが逆になっていて。さらに隣には同じ大きさのシングルベッドが、人ひとりが通れる程度の空間を挟んで向こうの壁際に置かれている。

窓の位置もカーテンの柄もすべて変えられていて、一人暮らしの私の部屋が全然違う場所になっていた。広さは同じくらいなんだろうけど、何だか、というか全く別の部屋だ。そうはいつても、インテリア的には決して嫌いじゃない感じだけだ。

そして、身につけているパジャマはシンプルなパステルグリーンのストライプ。確かにこれも私の好みの形と柄のものなのね。でもこんなのは持っていなかったはず。

さーっと血の気が引いて、その直後に背中を冷たいものが流れていく。どういふことなの、私ってばまさか振られたショックであらぬ事をしでかしてしまったんじゃないでしょうね？ ああ、記憶がない、全くとって全然記憶がない！

頭を前後左右にぶんぶん振ってみたところで何か思い出せるはずもなく、そんな私の耳に追い打ちをかけるように聞こえてきた声。

「……うう、いたいよお〜ママ……」

ハッとして。先ほどのむにゅ、の方を見た。そういえば、最初に驚いたのはあの違和感だったんだっけ。その後の衝撃が大きくて、すっかり忘れていた。

そうしているうちに盛り上がっていた布団がもそもぞ動いて、やがて小さな女の子が顔を出す。寝起きの髪があっちこっち向いてるくせっ毛で、小さい手は目をごしごすつっている。一連の動

作を終えたあと、彼女はこちらに向き直ってむくれ顔で言った。

「なかのおかお、ばんつてやったらいたいでしょ。ごめんなさいしてっ！」

くるくるの丸い目、ビー玉みたい。ああ、そうか。この子って、子猫に似てる。それにしても可愛い子だな、ちびっ子モデルになれそうなレベルだよ。

「……あ、ええと。ご、ごめんなさい……」

あまりに勢いがあったから、条件反射で答えていた。でもそのあとようやく、もつと大変なこと気づく。「ママ」？ 今、確かにそう呼ばれたわよね。何を勘違いしているの、この子。だいたい何で、私のベッドにこんな小さな子が一緒に寝ているのよ。

「あの——」

話しかけようとしたとき、女の子はデジタル時計を見て、叫び声を上げた。

「たいへんっ！ ママ、ようちえんバスがきちゃう！ おねぼうだよ〜ねええ、はやくごはんつくって！ それからおきがえもだしてっ！」

とにかく彼女にとってはとんでもない緊急事態らしく、ぐいぐいと力任せにパジャマの裾を引っ張られた。え？ え？ どういうことなの？ どうなっているの！ もうもう、頭は大パニック状態。一体何がどうしちゃったの。だつて私は「ママ」なんて呼ばれる筋合いはない。ぴかぴかの〇L一年生で、今朝だつてこれから出勤するんだ。

わ、七時半。大変、こんなことしていたらこつちが遅れちゃう！ どうしてちゃんと目覚ましが鳴らなかつたのかしら。昨日はシャワーを浴びた記憶もないから、これから一通りの身支度をして

……ああ、間に合うかしら。

パニックつつも、頭の中であれこれ計算をする。シャワーに十五分、身支度に十五分……か二十分で、髪を乾かして、メイクして。わ、このままじゃどう考えても八時十五分の電車には乗れない。ウチの会社、九時始業で私は受付だから。今日は早番じゃないけど十分前にはちゃんと席に着かないと。やだ〜絶対遅刻しちゃう！

「ママ？」

あ、また忘れていたわ。我に戻ってみれば、さっきの女の子が不思議そうな眼差しでベッドの横に突っ立っている。うう、ごめん。悪いけどあなた邪魔なの、どいてね。

「ねええ、ママ。きょうのママはなにかへんだよ。おはようのきゅうは？ どうしてしてくれないの？」

だ〜か〜ら〜っ！ 何なのよ、それは。こつちはそんな場合じゃないの！

そう心で叫びつつ、身体をずらしてようやくベッドから下りた。——と。

「なあ、千夏？ グレイの靴下が片方、ないんだけど。昨日洗ったはずだよな」

がちやり。格子に硝子のはめ込まれた目の前のドアが開いた。もちろんこれも見覚えのないものでも現れたその声の主に、思わずこんな叫び声が出た。

「ま……榎原……くん！」

そうだ、間違いない。この人は同期入社で営業部の榎原くんだ。その人がどうしてここにいるのよ？ 何故私の名前を呼び捨てにするの。昨日まで彼は私のことを「墨田さん」と姓で呼んでいた

はずなのに。

「千夏？」

榎原くんの方はちよつと呆けた顔になる。うわつ、今気づいた！ 彼、上はワイシャツを着ているけど、下は……何なのつ、下着一枚じゃない！ きゃあ、いきなりこれはないでしょう。目のやり場に困っちゃう！

「ななな、何で。何で、榎原くんがここにいるの。っていうか、ここはどこ？ 一体、何がどうなっているのよ！」

目を逸らしても、どうしても脳裏に今見たばかりの残像が残り、知らないうちに頬が赤くなってしまう。え〜ん、自慢じゃないけど、男の人の下着姿なんて父親と弟のしか見たことないんだから。ばっちり確認しちゃったわよ。赤地にペイズリー柄のトランクスが頭から離れない。

「どうしたんだよ、何寝ぼけているんだ？ おい、千夏。どこか具合でも悪いの？ 今朝はいつまでも起きてこないと思ったら……」

自分でも知らないうちに腰が抜けていたのね。カーペットの上にしりもちをついて呆然としている私に、榎原くんは遠慮なく近づいてくる。どうにかして視線を逸らしていたのに、とうとう視界にすね毛の生えた筋肉質の足が入ってきた。こんなものをまじと見ても仕方ないもの、ゆつくりと顔を上げていく。

間違いない。昨日の今日にしては急に輪郭がシャープになつて髪型も変わった気がするけど、やっぱりこうして間近で見てもこの人は「榎原くん」だ。

「ねえ、これって一体どうなっているの。どうして、いきなり榎原くんが出てくるの？」

しかも下着姿で——とはさすがに言えなかったけど。それなのに、どういうこと。私の必死の質問に、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。眉をしかめて、嫌みのひとつも言いたそうだ。でもいよいよその口を開いて何かを言いかけたとき。彼の横をすり抜けて、もうひとつの物体が子犬のように走ってきた。

「ま〜!! きゅう〜!!」

軽くてあたたかいものがあつという間に膝の上に乗って、胸にしつかりしがみついた。ぽよぽよの薄い茶色の髪が私の顎の下で揺れている。さっきの女の子よりも小さいな、それにこっちはつるつるの直毛だ。

「あ〜ずるいつ！ ママ、りかばつかりじゃ、やだ！ なかも〜きゅう〜！」

傍らにいた女の子の方も、負けじと飛びついてくる。慌てふためく私を置き去りにして、ふたつのむにゅむにゅが押し合うように膝の上でうごめく。甘くて優しい子供の香りがあたりに充満した。

「あ、あの……榎原くん……？」

本当に何がどうなっているのか、どうしていいのかわからない。いよいよ途方に暮れて、傍らで私を見下ろしている顔に話しかけた。

「これって……この子たちって……もしかして、榎原くんの子供？」

そういえば、さっきの女の子。目元のあたりとか確かに彼に似ていた。間違いない。でも、子持ちなんて聞いてなかったよ？ 結婚しているってことも知らなかったし。

「この子たちが俺の子供って……あのなあ、千夏？」

そう言いつつ、彼は私の顔を覗き込む。でもその眼差しからさつきまでの苛立っていた色は消えていて、心底、戸惑った顔に変化している。そして、一呼吸おいてから彼はとんでもないことを言ってくれた。

「そいつらは真正銘君の子、君が産んだの。で、父親は俺。ちよつと待てよ？ 今朝はマジでおかしいぞ、頭でも打ったか？」

「すぐ困っている様子なのはわかる。でも、そうはいつでもこっちだつて——」

「……はあ？」

何が何だか。パニック状態の頭で、ほっぺをつねったり瞬きしたり。でも全然夢から覚めてくれない。これぞまさに晴天の霹靂。そんな風にして、私の新しい朝が始まっていた。

榎原くんは社内では新人ながらかなりのやり手と評されていた。この不況下において、営業畑でそれなりの実績を残すのは至難の業だと思う。なのにその道の先輩方がやっかむぐらいに、彼は断然目立っていた。

私とは同期入社だったけど、こちらは短大出身。彼の方は四年制大学を出ているし、一浪してる。だから実際は三歳年上になるのね。そうはいつでも同期は同期。部署を越えての親睦会で何度も会っていたし、顔なじみではあった。でもそれだけのこと。

会社に「直接、営業先に回るから」と連絡を入れてから、彼はこちらにくると向き直った。さすがにあの格好のままではいられなかったらしく、今はちゃんとスラックスをはいている。自力でグレイの靴下も探してきた。アイスグリーンのシャツに合わせてモスグリーンの幾何学模様のネクタイを締めて、髪もきっちり整えてすぐにでも出勤できる体勢。

彼はその姿になってから、先程の女の子の大きい方「菜花ちゃん」を幼稚園バスの停車場まで送ってくれた。ちなみに小さい方「梨花ちゃん」は朝のお子様番組にお世話をお願いしている。

明るい日差しがさんと降り注ぐ朝のダイニングで借りてきた猫のように身体を縮めて、私は椅子に座っていた。

「ふざけているわけ……ではないんだよね」

自分に言い聞かせるみたいにそう言いながら、コーヒーの入ったマグカップを目の前に置いてくれる。それから自分の分も同じように用意して、彼ははず向かいに座った。よく見ると、このカップもペア。イラストは違うけど明らかに同じ作家によって描かれたもので、色は榎原くんが黄緑色で私のがオレンジ。実はスリッパも同様。

「そ、そんなわけないでしょう、冗談でこんなこと言えないわ。何度も説明したとおり、私は昨日までちゃんと会社に通っていたのよ。それが、目が覚めたらいきなりこんなことになっていて……本当に、何がどうなっているのかわからなくて……」

営業のノウハウをたたき込まれた榎原くんの態度にすくんでしまう。うう、この人には敵いそうもないわ。じつと相手の目を見る眼差しは、どこまでも穏やかでありながら決して標的を逃すこと

のない鋭さも同時に兼ね備えている。彼は今、私の真意を探っているのだ。でも、そうであっても私はひるんだりはしない。何が何だっておかしいんだから、この状況。

いつまでもパジャマのままじゃ変だし、私の方もとりあえず普段着らしき服装に着替えた。それがね、教えてもらったクローゼットを覗いて、またびっくり。出勤に使えそうなスーツ類はほとんどなくて、あるのはニットスーツやスウェット地のラフなもの。それどころか時々、え？ と思うような花柄のフリフリな服を見つけたりして。

さすがにこれはないだろうと慌てたけど、隣のタンスに同じ柄の子供用があることから、どうも親子でお揃いにしたんだな。下着もおしなべて実用主義、デザイン性なんてどこかに行っちゃったみたい。パンツはおへそが隠れるくらい大きいし。

何より驚いたのは、鏡に映った自分の姿が一晩のうちに髪型から輪郭まで変わっていたことだ。さつき榎原くんを見て違和感を覚えたけど、あの比じゃないよ。アイロンでまっすぐに揃え、毎晩の手入れを欠かさなかった自慢のロングヘアが肩下で切りそろえられてる。それも寝癖のようなラフなウェーブ。色も心持ち染めてあるみたいで明るい。頬がこけている。肌の調子もあまり良くない。メイク道具が一通りかごに詰まっていて、そのどれもが見たこともないパッケージ、「美白」や「保湿」に加えて、リフトアップとかそういう表示が多い。

そして見てしまったんだ、着替えのとき。一回り太くなったおなか周り。手足は元どおりに細いままだったけど、見えない部分には明らかに以前はなかった「たるみ」がある。お尻の肉もたれてきていて、とりあえずそれはガードルで包んだ。

私はすでに退職していて出勤着になる必要はないみたい。それならばとクリーム色のニットスーツを着た。髪にクリームをなじませて整えると、カチューシャで形作る。鏡の前に立っている自分がどう見ても「OL」ではなくて「若奥様」であるのに気づき、ため息が出た。

カレンダーを見ると、日付は同じなのに、六年が過ぎていた。ここまで証拠を突きつけられても、やっぱり信じられない。大がかりに騙されているならその方がいいと思う。でも、そんなことされる覚えもないしなあ。

「うーん」

榎原くんは腕を組んで目を閉じてしまった。そうしている間にも、何か考えているのかもしれない。「若年性認知症というのもあるんだけどな、それにしても急すぎるよ。だって、昨日の晩までは全く普通だったんだから。でも、千夏が今までのことをすっぴり忘れてしまったんだと言うなら、今はそれを信じるしかないよな」

真剣にそう話す彼の後方では、こちらに背を向けてTV画面に釘付けで、あうあうと声を上げて座ったまま身体を揺らしている梨花ちゃんがいる。

上の、今幼稚園に行ってるのが四歳の梨花ちゃん、こっちの梨花ちゃんは一歳三ヶ月なんだって。梨花ちゃんはどうやく歩くのが上手になって片言で色々しゃべるようになったが、とにかく人見知りか激しいらしい。そんな風に子供のことをあれこれ説明する榎原くんはどこから見てもいい「お父さん」だと思った。でもこの子たちを私が育てていたなんて。その上、私が産んだ子だなんて……

「で、六年前までのことは覚えているんだね？」

「はい、……そうです」

質問に答えつつ、何とも気恥ずかしくて落ち着かない気分になってしまう。おずおずと目の前の人を見る。榎原くんは私にとつてただの同僚、ずつとそう思っていた。一体どういう経緯で私たちは結婚したのだろう。で、そうだよな。本当に子供をふたり産んだのだとしたら、最低でも二回は……その、あの……そうなんだよな。

この都内の2LDKの分譲マンションで五年以上も結婚生活を続けているのだと聞かされた（ちなみに二十五年ローンだったが、繰り上げ返済というのをして、あと十年分になっているらしい）。さらに。左手にはまっていたマリッジリングを外して裏を見てみた。五年前の九月五日の日付が入っている。「T to C」という彫り文字……「T」は榎原くんのファーストネームの「透」の頭文字に他ならない。同じデザインのリングがちゃんと榎原くんの左手の薬指にはまっていた。

「——ま、仕方ないよ。こんなに簡単に忘れたんだったら、きつとすぐに思い出すと思うし。しばらくは気楽に考えて、ゆっくりしてなよ。それでいいじゃないか」

「え……？」

何とも簡単に結論が出て、こちらは驚くばかり。

「ちよつと、待ってよ。まさか、榎原くんはこのまま仕事に出かけちゃうんじゃないでしょうね？ 私をここにひとり置き去りにして」

あり得ない、絶対にそれはないって言つて。祈るような気持ちで答えを待ったのに、彼は容赦ない。

「まさかつて、そりやそうだろう。取引先との約束はすつぽかすわけにはいかないよ、そのくらい千夏だってわかつてるだろ」

そんな風にあつさり言わなくなつて。ねえ、もう少し何か名案がないの？

「ええ、私、ちっちゃい子の面倒なんて見たことないわ。おむつだつて取り替えたことない、本当に困る、絶対にできない！」

ここまですると、いい加減駄々つ子だ。大人げないもいいところ。でも駄目。引き下がれない。「大丈夫だよ、今はパンツ型のおむつだから。時々覗いてみて、濡れていたら交換すればいいんだよ。あ、おむつは燃えるゴミね、毎回ちゃんと袋に入れて始末しないと臭うからそこだけ気をつけて」

彼はチラリと時計を見ると、さつさと席を立つ。これから出かけると、丁度いい時間なのだろう。

「え、え？ 待って！ 待ってよつ、榎原くん」

慌てて、彼のシャツの袖を掴んだ。話はわかるんだけど、すぐわかるんだけど。でも、ここに置いていかれたらやつぱり困る。夢ならば今すぐにも覚めて欲しい。こんな悪夢はさすがにないと思つ。

「だって、本当に何にも覚えてないのよ。というか、悪いけど今までの榎原くんの話だつて信じられないもの。これから菜花ちゃんのお迎えだつてあるんでしよう、道端で誰かに会つたらどうするの。いちいち何も覚えてませんつて言うの？ それに、もしも電話がかかってきたら？ 誰かが訪ねてきたら？ 行かないで、本当に私、どうしていいのかわからないのよつ！」

朝の日差しが眩しいダイニングとはあまりに対照的に、私の心は不安で今にも押しつぶされそう

だった。こういうのを錯乱状態と言うのだろう。心の中に疑問符が湧いてそれが次々に分裂していく。握りしめた袖に穴が開くくらい爪を立てて、ギリギリと音を立てる。必死で榎原くんを見つめていた視界がだんだんぼやけていく。

「……千夏」

ぼやけた視界に佇む榎原くんは、本当に困った表情になって目を細めた。私の大きく震えている腕を静かに解く。固く握りしめていたはずの手がするりと抜けてしまう。そのくらい暖かくて自然な行為だった。

「わかってくれよ、今日の商談は今後を決める大切なものなんだ。俺がいないと大口の注文がフィになっちゃうんだから。会社にそんな損失を与えることはこのご時世できないの。もちろん、今日是可以る限り早く帰ってくるから」

テーブルの上のティッシュを取って、私の顔を丁寧に拭いてくれる。顎の方まで回った涙の滴まで残さずに。その後、呆然としたままの私に彼はにっこりと微笑んだ。

「バスは角のところに着いて、そこで降りるのは菜花ひとりだから先生にお礼を言えば大丈夫。もしも誰か近所の人が通りかかったら、きつと菜花がすぐに声をかけるから。適当に相づちを打っておけばいいよ。別に千夏がみんな忘れちゃったことを話す必要はないだろう。きつとすぐに思い出すんだから」

「……榎原くん……」

穏やかな説得口調に段々乗せられていく。ぼんと頭の上に置かれた手が、やがてすると髪を

滑りながら頭の後ろに回る。にわか指先に力が込められて、そのまますつと抱き寄せられた。

「……!!」

あんまりに驚いて、反射的に払いのける。やだ、いきなり何するのよ。

「やつぱり、覚えてないって本当なんだ。そうなるよ駄目か、こういうの」

一方の彼は首をすくめて、ちよつと残念そう。

「駄目かって、当たり前でしょう。私と榎原くんはそんなじゃないもの、私にはちゃんと他に好きいな人が——」

そう言いかけて、ハツとする。次の瞬間、見上げた榎原くんの顔が何とも複雑な色を見せていた。「ふうん、好きな人。そうなんだ」

ああ、そうか。あれから六年も経っていたんだっけ。で、長い時間が経過して、私の今現在の気持ちはどうなっていたんだろう。

「え？ ええ？ あの……何だか混乱しちゃって……」

しどろもどろ、この気持ちはどうやって説明したらいいのかわからない。

「ま、戻ってきたらまた話の続きをしようよ。とにかく、行ってくるから。今日は家から出ないで大人数くればばいいよ。午後から雨だつて予報だし、そうなればさすがに菜花も公園に行こうとか言わないだろう」

今度こそ、本格的に時間が押ししているらしい。さつきよりきつぱりと言うと、彼は上着を羽織ってコートを手にした。

「じゃ、気をつけて。——梨花、パパはいつてきます、だよ」

声色が変わり、甘い響きで梨花ちゃんに声をかける。TVの画面を見ていた背中がくると振り向き、すつくり立ち上がった。

「ぼぼぼ、……ちやい」

多分彼女は『パパ、いつてらっしゃい』と言っているつもりなんだろう。ぼてぼてと歩いてきた小さな娘を嬉しそうに抱き上げて頬ずりする。そんな元同僚のすっかり父親している姿を、私はとても不思議な気持ちで眺めていた。

「は、いい子でいるんだよ」

彼はそう言うと、私の方にくると向き直り、おもむろにそのひよこ色の小さな生き物をこちらに手渡してきた。

「じゃ、頑張つて」

柔らかい温かさに気を取られているうちに、彼はにっこりと微笑むとさっと手をあげる。

「ちよ、ちよとおく榎原くん」

ドアの向こうに消えていく唯一の頼りを、途方に暮れて見送る。腕の中のひよこが身体が揺れるぐらい大きく手を振り続けていた。あんまり元気が良くてずり落ちそうになったお尻を支えて揺り上げる。

その仕草が自分の意思とは裏腹にちゃんと形を覚えていた。

2

「透トウ？」

もちろん知ってはいたものの日常は口にしていなかった彼の名前が、私の口からもどかしげにこぼれた。そのときの私は、何とも複雑な表情をしていたのだろう、榎原くんの方は何だか楽しそうだ。「そう、千夏は俺のことそう呼んでいた。同じように呼んでくれたら、もしかして何かをきっかけに思い出すんじゃないかと思って」

「は、はあ……」

そうは言われても、いきなり同僚のことを、ファーストネームで呼び捨てにするのは気が引ける。これではまるで恋人同士みたいじゃない。あ、いえ。今の私たちはそれよりもっとすごい「夫婦」って関係らしいのだけ。そんなことは今の私が知ったことじゃないもの。

夕方、榎原くんが五時過ぎに戻ってきたときにはどんなにかホッとしたことか。玄関に子供たちと共に迎えに出た私に、彼は吹き出した。それって、ひどい。こちらの苦勞も知らず、あんまりにも失礼だと思ふ。

「だって。あんまりにも情けない顔するんだもん」

彼はくすくすと笑いながら、レタスをむいている。

子供たちはやはり夕方のお子様番組に子守して頂いて、私たちはとりあえず、榎原くんが帰りに買ってきてくれた材料を使って夕食を作っていた。すごいなあ、TVって有能なベビーシッターになるんだわ。

対面式のカウンターキッチン結構広く造られていて、使いやすい。我ながらきちんと掃除をしていたらしくぴかぴかのシンクに惚れ惚れした。つり棚には食品保存用のパックが整然と並んでいて、買い置きของラップやホイルもある。流し下の戸棚にも鍋やボウルなどの調理道具が取り出しやすくしまわれていた。どれも初めて見るものだけど、やはりどこか懐かしいような不思議な気分になる。

一日中ボーっとしていても仕方がないので、朝からずっと勝手のわからぬ家の中をうろろして、そこら中を物色していた。不法侵入でもしているみたいで気が引けたけど、よくよく考えたら私の家なんだから。それでもいちいち不思議な気分だった。

「そんなこと言ったって、本当に大変だったんだから。梨花ちゃんときたら、抱っこしてればとてもご機嫌なのにおろした途端に私を追いかけ回して大泣きするんだもの。ト、トイレにすら入れなくて……泣きたくなっただから」

今夜は菜花ちゃんの好物だというハンバーグを作っている。挽肉をこねながら、何ともやるせない気分になった。

私は三人姉弟の一番上で、当然下の弟と妹の世話はしていた。でもさすがに赤ちゃんのお世話な

んてしたことない。早く結婚した友達や従姉の赤ちゃんを抱っこさせてもらったことはある。でもこんなふうにはひとりきりで何時間も面倒見たことはないし。得体の知れない生物との接触は、想像以上に体力と精神力を消耗した。

「千夏、結構子育てを楽しんでいるみたいだったんだけどな」

雑談を続けながらも、ものすごく器用な手つきでスパゲッティのサラダを仕上げている。銀杏切りのリングと缶詰のみかんは子供仕様かしら？

「榎原くんって、料理が上手なんだね」

思わず、口をつけて出てきてしまう言葉。不思議そうに私を見上げた顔が、そのまま嬉しそうに、とっと笑った。

「改めて言われると、それはそれで嬉しいもんだな。学生時代、レストランでバイトしていたんだよ。だから家で普通に食べるメニューなら、一通り何でも作れるよ」

「ふうん。で、私より、上手だったり……した？」

自慢じゃないけど、私の料理の腕はたいしたことなかった。一人暮らしでもほとんどコンビニースーパーのお総菜に頼っていたもの。おみそ汁でさえ満足に作ったことがなかった。作って作れないことはないのだけど、ほらひとり分を作るのってかえって不経済だったりするでしょう。

そういうえば、さつき榎原くんはわざわざ煮干しでだしを取っていたな。私、顆粒かりゅうのだしの素しか使ったことないのに。

「あ、とりあえずハンバーグの焼きは俺が担当するから。千夏のは表面は素晴らしく焦げ色付けて、

生焼けなんだよな」

「……そう」

私は手にしたフライパンをそのまま彼に手渡した。何だか今までの日常が目には浮かんできると悲しい。私はこの人の前でどれくらい多くの失態を演じてきたんだろう。

じゅうじゅうという音にお膳立てをしながら振り向けば、彼はハンバーグを焼いたフライパンの中にケチャップやソースを入れて、即席のデミグラスソースもどきを作っている。ハンバーグって焼いたのにお皿の上でケチャップをかけるんじゃないかと思ったのね。そんなこんなで出来上がった夕食はほとんどが榎原くんの手によるもの。正直、とてもおいしかった。

食後、彼は当然のように食器洗い機に汚れ物をセットしてくれて、コーヒーを用意する。極上の香りに部屋中が満たされるのを待つ間、私は洗濯機の使い方を聞いた。

そうなの。まあ、やることないし、洗濯でも思っつて、午前中に洗面所に入っつて驚いた。当たり前といえば当たり前だけど、電化製品も洗濯機を含めすべてが私の知っているものとは姿を変えている。ボタンがたくさん付いていて、どこを押したら動き始めるのか悩んじゃって……結局そのままにしちゃったのね。

こんな風に事実を突きつけられていくと、次第に私の中にある「担がれているのかな」という期待が徐々に消えていく。でもやっぱり、そうであっても受け入れるにはこの状況変化は大きすぎる。絶対に無理っつて、榎原くんだっつてきつとわかってくれるよね……？

菜花ちゃんと梨花ちゃんはお昼寝をほとんどしない代わりに夜早く寝る。お風呂は戻ってきた途端に榎原くんを入れてくれたので、ご飯のあと、簡単な寝かしつけで休んでしまった。

でも。このお風呂が……また。だっつて、入れてくれるのは彼でも「もういいよ」と言われてバスタオルを持つていくのは私。がちゅつとバスルームのドアが開いたら、湯気の向こうに……あの。声にならない悲鳴を上げて、慌てて顔を逸らしちゃったわよ。でも、こういうときって、やっぱり、一番に目がいく場所が……ううう、一瞬、見ちゃったじゃないの。

「ママ、どうしたの？ おかおがまっか」

ドアに背を向けたまま、うずくまっていた私に不思議そうに菜花ちゃんが聞いてくる。子供相手にはいつまでもうなだれているわけにもいかず、びしょびしょのはだかんぼうをタオルで包んで拭き上げた。で、菜花ちゃんはいいのだ。だっつて、自分で歩いて出てくるから。問題は……

「ほら、千夏。梨花が出るよ」

すぐ背後で声が出た。そうなの、梨花ちゃんは足元がおぼつかない赤ちゃんだから、滑ると大変。いつも手渡しで受け取るらしいのだ。

「う、うん」

腰にタオルでも……ああ、巻いてくれないな。仕方ないからできるだけ顔を背けて、正面を見ないようにしながらバスタオルを広げて受け取る。

「何だよ、千夏」

そのまま、くるんと回れ右をした私に榎原くんが呟く。

だからもう！ わかつてよ……男性ヌードを鑑賞する趣味はないんだから。まあ彼にしてみれば、妻である（らしい）私に今更照れることもないだろう。でも私は、今の私には榎原くんとはただの同僚だと思っていた六年前の記憶しかないのだ。日常生活とはいえ、こういうのは困る。

後ろのドアは元どおりに閉められて、彼はシャワーを浴び始めたらしい。硝子のドアにしゃわしゃわと水の当たる音がする。マンションと名が付いていても、やはりお風呂は狭いのだ。それでもまあ、ユニットバスだった私のアパートよりはいいかな。

「あああ、もうっっ！」

私はバスマットのの上にしゃがみ込んで、今日、何度目か知れないため息をついたのであった。

「飲む？」

カットグラスをふたつ出してきた榎原くんは、その片方を私の目の前に置いた。いつもこんな風に私の分の飲み物を用意してくれるのかな、とても慣れた手つきなのね。もちろんありがたいたくことにする。

ようやく小さな子供たちがいなくなって、ふたりきりでゆっくり話ができるようになった。あの子たちがいると五分もおかずに途切れなく何か言いつけられる。ぼんやりとももの思いにふける時間もない。

梨花ちゃんも赤ちゃんのはずなのに、自己主張が強くて三歳上のお姉ちゃんと対等におもちゃを取り合うのだ。引つ張り合って、取られた方が大泣きをする。そういうやりとりも頻繁に起こった。

もうどうしていいんだかわからない。

菜花ちゃんはひとりじゃトイレに行けないし、梨花ちゃんに至ってはおむつだ。しかも誰がしつめたのか、お尻が濡れると新しいおむつを出してくる。いいことだと素直に感動していたら、どうもおむつを持って歩くことそのものが彼女のマイブームだったらしく、いつの間にか納戸をおむつだらけにされてびっくり。包みの端っこを器用に指でこじ開けて、買い置きしてあったらしい三パツクがすべてが床にばらまかれていた。とても一歳三ヶ月の赤ん坊の作業とは思えない。

とぶとぶとぶ、注がれたのはロゼのワイン。これと同じ瓶が納戸にいっぱい置いてあって何かと思ったら、ボーナスの一部が現物支給だったと聞いて驚いた。ウチの会社はワインを扱っていないよ。そうじゃなかったのかと聞いたら、取引先がお金で払いきれず、ワインで払ってきたという。そんなことってあるのだろうか。今は物々交換の時代なのかしら。

「で、何か思いましたの？」

ワインを一口飲むと、榎原くんはおもむろに切り出した。いきなり核心を突いてくる。きつと一日中聞きたくてうずうずしていたんだと思う。

今、私たちはご飯を食べていたダイニングテーブルではなくて、TVの前に置かれたソファの方にいる。それはいわゆるラブソファというやつで、榎原くんにどかっと腰を下ろされると私の座る場所はない。避けてもらって座ればいいのだろうけど、なんとも微妙な距離感に躊躇ためらってしまふのね。

結局、低いテーブルにしがみついてラグマットの上にじかに座り込んだ。榎原くんとは九十度の

位置。でも今までの私はどうしていたんだろう、当然のように彼の隣に座っていたのかな。ううん、そんなこと。未だにこの目の前の元同僚と結婚して当たり前前に生活していたなんて信じられないのに。「ごめん、何も」

首を横に振る。すぐく申し訳ない気分になる。その後、そっと榎原さんの顔を覗き込んだ。

「何？」

瞬きをふたつ。眉間にしわを寄せて難しそうな顔をする。

「別に……何でもありません」

彼の顔を穴が開くほど凝視してみたところで、何かが浮かんでくるわけでもない。六年の時間を飛び越えた同僚が、私が知っているよりもずっとラフな格好でソファに身を沈めているだけだ。

昼間のこと。

マンション探索の途中。廊下に造り付けられた戸棚の扉を開くと、一番下にずらつとアルバムが入っていた。菜花ちゃんと梨花ちゃんの産まれてからのものがそれぞれに数冊。それから、ひときわ目を引く真っ赤な表紙のものを見つけて開いてみたら。そう、それはまさしく結婚式のアルバムだったのだ。仮装大会としか思えない私と他でもない榎原さんの和装と洋装の式服姿がいっぱい。自分の写真なのに、何とも気恥ずかしい。ウエディング・ケーキの入刀、キャンドルサービスに花束贈呈。真っ赤になりながらそれでも一通り見ていると、いつの間にか横から覗いていた梨花ちゃんが嬉しそうにDVDを持って歩いてきた。

「あい、……あい」

そうか、これが観たいってことね？ そう思っで一応再生してみたら……ぎゃあ、何コレ！

結婚式を録画したものじゃないのっ！ 動いているとさらに恥ずかしさ十倍！ でも、コレの存在を赤ちゃんの梨花ちゃんですら当然のように知っているということは、もしかして何回も観てるってこと？ しかも家族で。そんなのやめてよね、全くもう。

「なあ、こんな言い方すると信じてないようで悪いんだけど。本当に、俺のことをからかっているんじゃないよね？」

そう言いながら、彼はタバコに火をつける。一応、子供たちの前では禁煙しているみたい。蓋の付いた吸い殻入れを棚の上から持つてくる。空気清浄機を自分の方に向けて、フーツと息を吐いた。「からかっているんじゃないよ、ないもの。そんなことして、何か私にメリットでもあるの？」

ここまで言われると、さすがにムツときた。そりゃ、信じられないのはわかるけど、やつぱり嫌な気分。そんな私の視線に気づいたのだろう、榎原くんは照れたように笑った。

「ごめん、ごめん……だって、昨日の今日だし」

「……は？ 昨日の？」

「どういうこと？」

そのとき、ふたりの間の空気がわずかに揺れた気がした。思わず、本能的に後ずさろうとすると、それよりも素早く榎原くんの右手が私の左腕を取った。彼は左手に持ち替えたタバコをもみ消す。

「ななな、何？ ちよつと、離してよ！」

マジでやばいと思った。何なのよ、いきなり何するのよ！

ふるふると震えている私の腕を掴んだまま、彼はその笑顔の色を変えた。——何といいのか、意味深で……それに、何かを含んでいるような。

「千夏が、言ったんだよ、今夜から解禁にしようって」

「……え？」

わたしはそのままバランスを崩して、仰向けにラグの上に倒れ込んだ。その上に勢いよく覆い被さってくる榎原くん。あんまりのことに言葉も出ない。驚きに恐怖の色を上塗りした表情でいるだろう私に、天井に埋め込み式の白熱灯を背にした彼が言い放つ。

「三人目、そろそろ作ってもいいって言ったんだよ。だから、生理が終わったなら、生なまでできるって」

「……え……」

あまりのことに、声がひっくり返ってしまう。喉の奥でぐもる裏声。何よ、何よっ、それって！ どういうことなのよ！

心と身体の手首をマットの上に押さえつけられて、これじゃ身動きもできないじゃないの。両方の手首をマットの上に押さえつけられて、これじゃ身動きもできないじゃないの。

ふわっと。顎あごのあたりに髪の毛の気配。音もなく、彼の身体が私に接触してくる。首筋に生暖かいものを感じた。

間違いなくこれは榎原くんの吐息だ。次の瞬間、もろに首筋にくつついた感触。生ぬるくてちょっと湿っていて、これは……その。

「千夏」

左の首筋からゆっくりと下りてきたそれが肩に辿り着いたとき、初めて離れる。それから鎖骨をつつと通って、そのまま胸元に潜り込んできた。そのときになって、ようやく身体に血の通った感覚が戻ってくる。

「やああっ！ やめて！ 本当に、やだっ！ 放してっ！」

完全に榎原くんのペース、このままでは本当の本当にやばいと思った。とにかく力の限り手足をバタバタと動かして抵抗する。どう見ても力の差は歴然としていたが、それでも彼が一瞬ひるんだ隙に飛び退いた。そのまま一気に掃き出し窓のところまで身体を移動する。まあ、これで背後に逃げ場がない状態になったので、にじり寄せられたら対処のしようがないけど。ああ、まだ心臓がばくばくいつてる。今にも壊れそうな涙腺なみだだん、どうにかなっちゃいそう。

「千夏？」

対する榎原くんの方はぼかんとして、そのままの位置で起きあがると姿勢を正した。

「榎原くんっ、ひどい！ いきなり何するのよ！」

はだけた胸元をぐぐつと押さえて、精一杯威嚇いかくする。これ以上何かしてきたら、今度は反撃しちゃうから。私だって、やるときはやりますからね！

「何って、あの、やっちゃいけない？ それがきっかけになって、思い出すかもしれないし」

何なのっ、この人。いきなり襲ってきたくせに、しゃあしゃあとよく言えるわね！

「信じられない！ 常識のある大人が、いきなりこういふコトするっておかしいわ。ちよつと、コシは一步間違えばレイプよ、レイプ！ 榎原くんなんて、警察に逮捕されちゃうんだから」

ぜいぜい、肩で息をしつつも私は必死。だって、この人は今この瞬間だって気を抜いたら何をやり出すかわかったものじゃない。柔らかな物腰で聖人君子みたいに見えるけど、そんなの見かけのものだったんだわ。

「……レ？ ……おい？ 千夏。俺たちは夫婦なんだぞ、夫婦だったらこういうの当たり前じゃないか。それに君が『解禁』なんて言うから、こっちは滅茶苦茶期待して——」

しどろもどろになりつつも、言うべき点はしつかり押さえて意見してくる。さすがやり手の営業マン——と、そんなことに感心している場合じゃなかったわ。こっちは貞操の危機に直面しているんだから。

「ま、榎原くんがどんなことを考えて、どんな風に期待したかは知らないわよ。でもつ、私は絶対に無理！ そんな気にはなれない。榎原くんはただの同僚だもの、それ以上の感情はないから」

そうだもの、まさしくそのとおりだもの。私、間違ったことは言っていないよね？

「感情つて、それ何なんだよ？ だいたい千夏、俺たちもう六年もこういうことしてきてるの、当たり前。君が忘れてたって、事実はそのうちのことなんだから」

そこまでしつかり言い切られると、さすがにうるたえてしまう。確かに彼の言うことはもつともなことかも。夫婦の夜の生活、仮に週に一度のペースだったとしても……もう何百回もよろしくしていることになるんだ。

でも、そんなこと言われたって「はいそうですか」とは納得できない。私は、今の私は、榎原くんの彼女でも奥さんでもない。身体はすでにそういうものなのかもしれないけど、気持ち的には違うんだから。

今日は朝からいきなり言葉も通じない赤ちゃん幼児を相手することになり、何が何だかわからないままの一日を過ごしてきた。受付のカウンターの前に座つてにこやかに「いらっしやいませ、どちらにご用でしょうか？」という生活を続けていたはずの私が、おむつと鼻水と着替えと幼児用ヨーグルトとオレンジジュースと、その他諸々の見たこともないパーツに囲まれて。それでも相手が赤ちゃん子どもだから、聞き分けがないのは当たり前だと我慢してきた。

でも、榎原くんはとづくに大人じゃないの。私の置かれた状況を正しく理解してくれただつていいはずだ。少なくとも、今の私には彼以外に頼れる人間も見つからないわけだし。それがこんな、考えようによつては子供よりもよほど始末の悪い行為に出ないで欲しい。

息も絶え絶え、涙目で睨み付ける私の視線の先に、困ったような情けないような表情の榎原くんが佇む。お風呂に入ったばかりで無造作に落ちていた前髪のせいで、昼間の姿よりも若く見える。あれから六年経って今年三十になったそうだ。対する私も二十七歳になっているらしいから、それも当然なだけだ。

「それに千夏、君だつてこういうの決して嫌いじゃなかったぞ。身体は絶対に反応するって、そうすればあとから気持ちも必ずついてくるから——」

うわっ、この期に及んでまだそんなことを言うの。信じられない人だわ。

「嫌！ 嫌と言ったら嫌なの！」

仕方ない。こっちは大きなクッションを抱きしめて、前方のガードに入る。こうなったら、パフ

オーマンスで気持ち伝えるしかないわね。

「……千夏」

それでもなお半開きのままの口元、切なそうな瞳の色。私の一メートル先で発せられるうねった空気。

どうしてこんなことになっちゃったんだろう。榎原くんは女性社員の中でダントツに人気があった人だ。芸能人にはあまり詳しくなかった私にはわからないけど、なんとかって若手の俳優の名前を挙げて似ているという声もあったほど。少なくともルックス的には同期の男性陣の中で抜きんでていたと思う。背だつてわりと高い方だし。

飲み会があればお酌しやくに行つて言葉を交わすくらいのこととはしていた。やり手の社員だと聞けば、どんな感じの人かと興味を持ちたりもするでしょう。受付嬢の中にも熱を上げている人はいたし——でも私にとつて彼は「それ以上」の存在ではなかったのだ。それが、何で、どういう経緯で私たちはこんな関係になつたの？

この距離感つて、とてつもなく危険。私がちよつとも承諾の表情を見れば最後、襲われてしまうのは必然だ。それだけは回避したい。

「や、何があつても駄目だから！　そういうことするつもりでいるんなら、今から実家に帰る！　この時間ならまだ電車はあるでしょう、駄目ならタクシー拾つてでも帰る！」

「な、何を言い出すんだよっ」

薄手のスウェットを着た榎原くんが慌てている。でも私は本気なもの、こんなやつて困るんだか

ら。榎原くんとういうことするなんて、想像もできない。絶対の絶対、無理だから。

しばらくは無言の睨み合いが続いた。でも彼にどんな怖い顔をされたつて私は平気。クツションから詰め物が出み出るくらいいきつく抱きしめて、こちらも負けじと睨みを返した。

「——わかつた」

やがて、深くため息をついた榎原くんがラグの上から立ち上がる。そして髪をかき上げながら、元どおりソファに深く腰を下ろした。

「今日のところは降参する、だからそんなこと言うなよ。今出ていかれたら正直困る。俺はともかくとして子供たちはどうするんだ、そう頻繁に休みが取れる立場じゃないんだからな。今週末の休みは予定を入れないようにするから、そこまで君は母親業に専念して欲しい。でも、千夏がこんな強情だとは思わなかつたな」

ずるい、そんな言い方しなくたっていいじゃない。それに何か、私の方が悪者みたいに聞こえるよ。「強情なんて……そんなじゃないもの」

私だつて、自分になりたくてこういう風になつたわけじゃない。そうは思うものの、私を見る榎原くんの視線が本当に悲しそうでちよつとだけ切なくなる。

どちらかというと、追う恋愛ばかりをしてきた。だからこんな風に強く求められることもなかつたし、正直昨日の私は六年後にこんな風になつていなんて夢にも思わなかつた。結婚願望がそれほど強かつたわけではないし、あのまま縁遠く生きていくんだろうなどと諦めてた。

あー、そんなこと考えたら自分が可哀想になつてきたじゃない。私はずるするとテーブルのどこ

るまで戻ると、さっきのワインを一気にあおった。甘酸っぱくて、その後すごい渋味が追いかけてくる。「もう少し、飲む？」

榎原くんは座った姿勢のまま、前のめりになってワインを注いでくれる。目の前でグラスが満たされていくのをぼんやり見たあと、顔を横に向けると至近距離で彼と目が合った。

「あんまり、考え込まないで。本当に悪かったって思ってる」

そんな風に言いながら、大きな手のひらがぼんぼんと私の頭の上で弾む。何だかじんわりと温かかった。まだとても気を許すつもりにはなれないけど、このぬくもりは嫌いじゃないなと思う。

私は一体、この目の前の人とどんな風に長い時を過ごしてきたのだろう——そんなことをふと考えてしまう。切り取られてしまったその時間を覗いてみたい気もする。でも、それをきれいさっぱり忘れてしまったのにはやっぱり何か訳があるんだよね？ そう考えたら、このままでいいかなとも思う。

「ううん、私の方こそ……ごめん」

そう言いながら、ワインを口に含む。さっきよりも渋みが強く口の中に広がっていった。

3

次の朝は目覚ましの合図ですっきりと起き上がることができた。習慣ってすごい、身体はちゃん

と覚えているって本当なんだな。一方、榎原くんは向こうのベッドでまだまだ夢の中。

眠い目をこすりながら身支度を整え、キッチンでこそごと朝食の準備をしていると程なくして「おはよう」と声がした。顔を上げると、カウンター越しに昨日の晩のことなんて忘れてしまったように見える彼の笑顔。

「あ……おはよう、榎原くん」

私の受け答えに、彼の顔がふっと曇った。どうも向こうは記憶が戻っていることを期待していたらしい。

「千夏に『榎原くん』と呼ばれると、急に遠い存在になった気がするんだよな」

そんな風に言われたって、困っちゃうんですけど。

「だって、仕方ないでしょう。私には『榎原くん』なのよ、他の呼び方なんてできないわ」

そう答えつつ、冷蔵庫から卵をパックごと取り出す。本当は私のことを呼び捨てにされるのもちよっと違和感があるの。でもそこまで禁止したらさすがに申し訳ないかと思うし。

「あ、目玉焼きだったら、俺は卵二個。両目にして、半熟ね」

頭だけシャワーで濡らしたみたい。肩から下げたタオルで滴を拭う。伸びかけたお髭、洗いつばなしの髪——正直、男の人のこんな朝の姿を見るのは肉親以外では初めてのことだ。ちよっとドキドキするね、口には出さないけど。

うーん、これってどう見ても夫婦のひとコマだよなあとか、そんなことをつい考えてしまう。そうは思ってもこの目の前の元同僚が自分の夫であるとは未だに認識できないし、したくもないけれど。

「はい、どうぞ」

カウンターのの上に朝食のお皿を乗せる。両目の目玉焼きとトマトとレタスと……昨日の残りのスパゲッティサラダを一口。それを受け取る榎原くんがくすりと笑う。

「どうしたの」

つい敏感に反応してしまう。今度は何を思ったの。

「あ、ごめん。ちゃんといつも同じ皿が出てくるから、不思議だなあって。でも俺はトーストにはジャムじゃないんだ」

そう言いながら、冷蔵庫の方に回って自分で「つぶつぶピーナッツバター」を出している。あら、コレは菜花ちゃんのものかとはかり思ってたんだけど、実は榎原くんだったのね。

「やっぱり覚えてないんだな」

そんな風に納得していたりして、ちょっとおかし。

身体が覚えていることはある。お皿の位置とか、冷蔵庫の中でどこに何を入れるかとかの細かい配置とか。でも榎原くんがどのワイシャツにどのネクタイを合わせるかとか、コーヒーにはクリームじゃなくて牛乳をとぼんと入れることとか、そういうことは忘れてしまっている。

だからまだ、何となく納得できていない。私がこの人の妻だったこと、私たちが夫婦だったこと。それと同じように榎原くんの方も私が本当に記憶をなくしているのかわかってないようだ。時々探るようにこちらを観察してる。

「今日は水曜日だから、園バスが早いからね。一時半に来るから気をつけて」

確認されて、思わずメモを取る。うん、忘れずに行かなくちゃ。

あのあとふたりで話し合っ、身内を含めて周囲の人には私のこの状況をあえて知らせないことにしようと決めた。接触することがあつたとしても、何となく話を合わせればいいということ。丸一日を過ごしてみてわかった、数年分の記憶が抜け落ちていても日常生活にたいして支障はないのだ。

あまり近所づきあいのない土地柄だと言うし、隣近所は共働きで顔を合わせることも少ない。どうにか乗り切っていこうということになった。もしかしてあつという間に記憶は戻ってくるかもしれないし、そうなったときのことを考えるとあまり大事おぼこにするとかえって煩わづらわしいことになりそうなのかもしれない。

「困ったときはすぐに連絡して」

仕事用とプライベート用のふたつのナンバーとアドレス、私の携帯にはそのどちらもが一番最初に表示されるように登録されていた。付けているストラップもお揃い、ちなみに彼の待ち受け画面は家族四人で撮った写真になっている。

落とした記憶の破片がそこらじゅうに散らばっていることに、いちいち驚かされていた。どこを見ても幸せな日常ばかり、でもあまり度が過ぎているとかえって嘘うそくさくさ思えてくるのは、私があるまのじゃくだから？

その上、出かける彼を玄関まで見送ると、信じられないことまで言う。

「いつてらっしやい、って。ここにキスしてくれるの、毎朝。しかもとびきり甘いやつ。それだけ

じやないよ、このまま離れたくないって抱きつかれて困ることだって頻繁なんだから」
はあ？

思わず目と口を開きつばなしで、榎原さんの指した場所を見る。右の頬に……本当に？ そしたら次の瞬間、彼はぷつと吹きだした。

「楽しい、思いきり本気にしたな？」

ワテンポ遅れて、やっとからかわれていたことに気づいて啞然。

「ままま……榎原くんっ！」

トマト色の頬になってしまった私を嬉しそうに眺めてから、彼はドアレバーに手をかける。

「いつてくるよ、今日も一日、頑張つて」

もう、榎原くんがこんな人だとは思わなかったわ。どちらかという口数も少ないほうで、そんな人がどうして営業成績を上げられるのか不思議だったっけ。

目の前で閉じたドアを見つめてたら、色々な最近（でも、実は六年前までのなんだけど）の記憶がじわじわと甦^{よみがえ}ってきた。

私には恋愛運がない。それは自分でもよくよくわかっていた。

最初は幼稚園のときの初恋。

覚えてたの平仮名で折り紙の裏に手紙を書いた。なのに同じクラスの彼は実はまだ字が読めなかったのね。とうとう私の気持ちを理解することなく、その後彼はお気に入りのゲームと一緒にやっ

てくれる子と付き合いだした。

こんな風に思い出すとあまりに馬鹿馬鹿しいけど、この出だしのつまずきがその後の人生に深い影を落としたのではないかと思うこともある。

小学校時代もいくつかの思い出したくない記憶がある。まあ、小学校のほとんどはガキ大将タイプの男の子に目を付けられていて「俺のスケ」状態だったのだ。あれでは好きな男の子ができても手が引く。別にその悪ガキのことなんてどうでも良かったのに、どうして相手が私のことに執着していたのかわからない。

中学生になってそいつと学校が別れたときには、やれやれと思った。そして中三のとき、同じクラスになった男子と結構いい感じになる。彼はサッカー部のレギュラー、颯爽^{さつそう}としたその姿はたまらなく格好良いのに全然気取ったところがない。ほんわかと少女漫画のような恋をした。体育館の裏でキスしたり、お弁当を持って練習試合の応援に行ったり。

でもねえ、早熟な彼が身体を求めてきたときはさすがに躊躇^{ちゆうちゆ}した。いくら何でも中学生だ。授業で性教育を習ったとはいえ、怖かった。もしもニンシンとかしたら、どうするの？ 産むの？ まさかねえ、堕ろすんだらうなあ。そういうのって、嫌だな。

で、そんなこんなしているうちに、別の中学の女子に彼を寝取られてしまった。呆然としている間に彼の方は相手の女の身体に夢中になりそれっきり。少女マンガな恋は開く前に散っていったってわけ。その後彼は成績も下降の一途を辿^{たど}り、どんな馬鹿でも受かると言われていた高校にまで落ちて、プーターローになってしまったただけ。それを考えると危ういところで難を逃れたと言うべ

きか。

高校に入ってからはずっと『思う人には思われず、どうでもいい奴ばかりが寄ってくる』という最悪の方式の中にどっぷり入り込んでしまった。

「あなたは、理想が高いのよ。女は好かれた相手と付き合うのが幸せよ。たくさん貢いでもらえばいいじゃないの、馬鹿ねえ」

スカートをパンツが見えるぐらいまで短くした友人は私のことを馬鹿にしてそう言う。みんなやりたいようにやって青春を謳歌おたかしていた。援交してる子だって少なくなかったと思う。一回寝るだけで何万ももらえると聞いたときはちょっと心が動いた。でも、クラスメイトが腕を組んで歩いていたのが、頭のつるつるな、いかにもヤーさん入った悪徳商売やってます風のおじさまで——いくら何でもあんなのは嫌だなあと思った。

それなら同じ高校生や大学生の中からチョイスするかと頑張って合コンに出たりする。でもそこでも巡り逢うのは究極の勘違い男が多い。まるで私の磁気に吸い寄せられるかのように、とんでもない男性ばかりが寄ってくる。ああ、そんなことを言ったらさすがに失礼か。でも、やっぱり人間は感情の動物だよ。好みというものがあるでしょう？

どうも私は、本当の自分よりもずっとしつかり者に見えるらしい。だからマザコンの気が強いような男性ばかりに好かれる傾向にあった。その手の輩やがは「君のすべてが素晴らしい！」とかなんとか息巻いて、始末に負えない。ちょっとお茶してあげたら「俺の女」状態、ご飯を食べたら次はママに紹介？ どうなってるの、今時の女性週刊誌だつてここまで大袈裟おおげさじゃないわ、という感じだった。

つた。

何度か痛い目を見たあとに懲りて、その後は言い寄る側に転換した。しかし、これこそが振られ人生の幕開けだったのである。

誰かを好きになる。その瞬間はいつも突然にやってくる。私は友達に言わせれば結構面食いな方らしいけど、自分では意識したこともなかった。

「こんにちは、よく会いますね？」

そう言っつて、声をかけてきた人。実はこちらとしても気になっていた。短大一年の夏休み。ようやく受験戦争から脱出したんだから今年くらいは楽しもう。そう言っつてシングルの友達と企画した北海道旅行だった。

休みの前半はふたりとも死にもぐるいで資金稼ぎ。丁度お中元のシーズンなので、デパートの商品包装のバイトがいくらでもあった。指紋がなくなるぐらい頑張っつて働いて、ささやかなお給料袋を手にする。

ユースホテルと安いビジネスホテルを渡り歩いて、ほとんど全土を回っていた。暇はあっても金はない、私たちみたいな貧乏学生は夏休みという時期もあって他にもたくさんいる。服装や素振りですそれは一目でわかった。白いTシャツとブラックジーンズのライダーさんがいて、行く先々で彼を目にする。あるとき広い丘で休んでいると、爽やかな笑顔で近づいてきた。

白い歯がこぼれて印象的で。真っ青な広い空の下、私の胸がどきんと鳴った。

「そう、今時、巨人ファン。しかも名古屋でさ、もう肩身が狭いつたら」

適当に話題を振っていたら、いつの間にかプロ野球の話になっていた。肩身が狭いなんて言いながら、彼はとても楽しそう。

「それだったら、杏奈ちゃんと一緒だね。杏奈ちゃんは東京ドームでバイトしてるんだよ？」

「へえ、そうなんだ」

私と一緒に旅行していた友人は大の巨人ファン。短大からそれほど離れているわけではない巨人の本拠地・東京ドームでビール売りのバイトをしていた。観客席を歩いて、声をかけられると売るといふあれだ。

「じゃあ、対戦も見放題なんだね」

わかりやすく身を乗り出した彼は、羨ましそうに友人にそう訊ねる。

「実はそんなことないの。試合がいいところになると、お客さんも次々と声をかけてくるから試合なんて見てられない。あのバイトはあまり良くないわ」

杏奈ちゃんは首をすくめて、つまらないのよ、と微笑む。

さらに彼は高校球児だったと言った。なんと甲子園に行ったんだって、夏の。一回戦で負けちゃったけど、県で優勝をしたときは観客席のフェンスを叩いて、大泣きしてしまったと言っていた。大学でも野球をやっていたけど肩を壊して、選手生活を終えたそう。さっさと就職も決まり、こうして最後の学生生活を楽しんでるんだって。

彼の言葉に私はぐいぐい引き込まれた。日常生活から切り取られた世界がそうさせたのかもしれない。

ない。刹那の出会いで私は彼に恋をした。

旅行が終わって、私の手に残ったのは彼の携帯の番号とメールアドレスだけ。それも本人が言っていたようにほとんど留守電で、なかなか繋がらない。

「これは、積極的に行くしかないわね」

杏奈ちゃんは明るく笑いながらそう後押ししてくれる。彼女は短いショートカットで少年っぽい感じの子だった。私はシャンプーの宣伝よろしく、さらさらにケアしたロングヘア。その頃背中の半分くらいまで伸ばしていた。そりゃ、TVタレントと比較したら相手にならないだろう。でも……それなりに魅力はあるんじゃないかなあと思っていた。

「でもどうしたら、いいのかしら？」

そうはいつても、何だか自信がない。夏休み前には、合コンで知り合った先輩に玉砕している。なんと彼女がいるのに頭数あわせて参加しただけだったんだそう。落ち着いた物腰で、女目当てでガツガツしているところがなくオトナだと思っていたら、とんだ茶番だったってわけ。

「まずは、じゃんじゃん連絡をいれることかしら」

彼はバイトや何やらでなかなか捕まらない。それでも三回に一回ぐらいはどうか連絡がついて、他愛のない話をした。

数ヶ月の間に、何度となく電話したことだろう。東京と名古屋は思ったよりも遠くて、会いに行くのは無理だった。バスケースに入れていた写真が段々色を変えていく。私の悪いところは飽きっぽいところかもしれない。

「何だか、脈ないなあ」

とうとうある日、杏奈ちゃんに弱音を吐いた。彼女はちょっと困った顔をした。

「あの……千夏」

彼女はとても言いづらそうにバッグの肩ひもを弄もてあそぶ。

「実は、この前の日曜日に彼と会ったの」

「——え？」

私はあまりにびっくりして、そう聞き返していた。

「急に、こつちに来る用事ができたんだって。みんなに連絡したけど、私しか捕まらなかつたって言うの。あんまり可哀想だったから、飲みに行ったんだけど。今度はみんなで、って言っていたよ？」

「そう」

ああ、日曜日は親戚の法事だった。連絡くれてても出られなかったしな。本当に間が悪いなあ。そのときはそう考えた。

そのまま、忙しさにかまけていつの間にか彼のことを忘れていて。やがて本格的な就職活動の時期になった。うちの短大は結構縁故が強くて、この不況下に色々とコネがきく。だから私たちはリクルートスーツを着て、あつちこつちに先輩訪問をする。自分のことに夢中だったから、一番近くにいたはずの杏奈ちゃんことも忘れていた。

ある日、何かがきつかけでふと杏奈ちゃんの就職はどうなったかなと思った。卒論の研究室が違うこともあって、その頃ではお互いあんまり顔を合わせることもなくなっていた。共通の友達に聞

いてみる。そして、とんでもないことを聞いてしまった。

「杏奈、卒業と同時に結婚するんだって。名古屋に行くから、就職はしないって」

思わず、我が耳を疑った。どういふこと？ 名古屋って、まさか——

その夜、さり気なく彼女を夕ご飯に誘い出した。

「ごめんね、千夏」

席に着くなり、泣き出しそうな声で彼女は詫びてきた。

「私も、彼のこと好きだったの。だから電話がかかってきて、何度か会って付き合おうって言われたとき頷いちゃった。そりゃ、千夏のことには気になったけど、あなたはいつの間にか彼のことを口にしなくなっていたから。もしも、千夏がずっと彼のことを好きなら、私は身を引いてもいいと思っていたのよ」

「ふうん、そうなんだ」

私は気がなさそうに答えた。

「早く、言ってくれたら良かったのに。何をそんなに心配しているの、こつちは全然気にしてないわよ」

私の言葉に杏奈ちゃんはホツとして表情を崩した。

「良かったあ、千夏のことはずっと気になっていたの。言えなくて、ごめんね」

その日の帰り道、駅で杏奈ちゃんと別れてホームに上がる。通過電車が強い風を伴って通り過ぎたとき、私の涙腺なみだが緩んだ。ふらふらとそのままベンチに腰かけて俯うつむく。あとからあとから涙が溢

立ち読みサンプル
はここまで

れてきた。

彼は、私を選んでくれなかった。どうしてなんだろう。

杏奈ちゃんと較べて、ルックスだってスタイルだって負けてないと思う。じゃあ、性格？ 私のどこが悪いの？ どうして私はいつも好きになった人に振り向いてもらえないの？

悔しい、どうしてなんだろう。本当にどうしたらいいのかわからない。

そんなことの繰り返しだった。

だから、この前（といっても六年前）、永峰さんに振られたときも悲しかったし、ショックだったけど……心のどこかで「ああ、やつぱり」と妙に納得していた気もする。

でも同じ受付の友達はどうも彼氏持ちになっていく。同じように親しくなって、同じように告げて——どうして私だけが駄目なのだろう。合コンに行っても、期待するような出会いはない。友人たちの愚痴の聞き役に徹しながら、実はいつでも悲しい気持ちでいっぱいだった。

4

「——千夏？」

ぱちつと、どこかが弾けた気がした。ハツとして、起きあがる。照明の眩しさに眼が慣れなくて、視界がなかなかはつきりしない。

「あれ、榎原くん。戻ってきていたの？」

私はベッドの部屋にいた。シングルベッドの片っぱにうつぶせになって、いつの間にか寝入っていたみたい。目をこすってあたりを見渡すと、もうすっかり夜になっていた。ああ大変つ、口元によだれが。

「あれ、珍しい。寝てるんだ、ふたりとも」

榎原くんの声を聞いて、自分が今どうしてこんな場所にいたのかをようやく思い出す。そうか、今日は幼稚園バスから降りた菜花ちゃんにせがまれてそのまま公園に行ったんだっけ。この寒空の下、ふたりとも驚くほど元気で、あちらこちらを走り回ったり遊具を楽しんだり。私の方も他に親子連れがいなかったことにホッとして、思いきり遊ばせてしまった。

その後、家に戻ると菜花ちゃんも梨花ちゃんも手が付けられないほどぐずって、だけど眠そうだな——ってそのまま寝かしてあげたのね。そしたら、自分まで一緒に眠りこけていたらしい。

だからあんな夢を見ていたのかなあ、私。昔の古傷を次から次へとえぐり出すような、後味の悪さが今も生々しく残っている。時計を見ると、七時半。

「夕食、どうしようか。ふたりだけなら、店屋物でも取る？」

呆けた頭に榎原くんの声が割り込んでくる。でも私はまだ、さっきの夢の中にいた。

「ねえ、榎原くん？」

そして、思わず呼びかけてしまう。それくらい、心が不安定になっているみたい。

「うん？」